

F/T13

FESTIVAL/TOKYO

ARTS
COUNCIL
TOKYO



東京文化発信
プロジェクト



TOKYO ● 2020

現在地 / チェルフィッチュ

作・演出：岡田利規

Current Location / chelfitsch

Text, Direction: Toshiki Okada

11.28 (Thu) - 12.8 (Sun)

東京芸術劇場 シアターイースト

Tokyo Metropolitan Theatre, Theatre East



対談：岡田利規×相馬千秋

震災後、変わりはじめた時間の中で

2012年2月に発表された、岡田利規（チェルフィッチュ）の3.11後の第一作『現在地』。信じるか信じないか、逃げるのか留まるのか……。ある日突然出現した青い雲をめぐり、揺れ動く7人の女性の心模様は、東日本大震災と福島第一原発の事故後の日本社会の分断を映しとるものでもあった。初演から1年半、その「物語」は、現在の観客にどのように響くのだろう。岡田とF/Tプログラム・ディレクター、相馬千秋の対話は、私たちと、演劇と社会との関係の、（現在地）を俯瞰するものとなった。

相馬 岡田さんはこの『現在地』で、それまでのリアルな作風からフィクションへと、大きく舵を切られました。2012年の初演を観た時、この作品の方向性が、震災後自分も漠然と感じていたことと同期していて、はっとしました。これまでのF/Tでは、ざっくり言えば、「リアルとは何か」を追求するもの、ドキュメンタリー的なアプローチの作品を多く扱ってきましたが、震災後、現実が虚構を超えてしまったり、現実と信じているものが虚構かもしれないと感じられるような状況においてはむしろ、フィクションが有効なのではないかと考えていたんです。

岡田 まるで口裏を合わせたみたいですね（笑）。たとえば僕はこのあいだまで、どっちかというフィクションに対して白けた態度、べつに舞台上で人が惚れたり殺したりされてもな、みたいな感覚を持ってたわけです。でもフィクションに対するそういう態度って、現代に限定された小さなタイムスケールの中でこそ持ち得たものだった気がします。それが原発事故という、万年単位のスケールで考えるしかない放射能が僕たちの前に現れる事態の到来によって、きっかけとして最悪のものですけれども、小さなタイムスケールから解放されました。

相馬 そのタイムスケールの変化で、フィクションが機能する扉が一気に開かれたということですね。『現在地』には、震災後私たちが置かれた状況を極端にわかりやすく寓話化したようなところがあ

ります。日本という国家が減じた後という設定など、そこで語られる物語はどれも予言的、SF的で、虚構の度合いがとても高い。

岡田 これまでやってきたことに、さりげなくフィクションを忍び込ませるといようなかたちは、まったく考えていませんでした。『現在地』では原発の「げ」の字も言っていないけど、むしろだからこそすべてが非常にあからさま。その露骨さや挑発で自分自身を緊張させることが、僕にとって必要な作業でした。

相馬 自分自身が緊張している「いま、ここ」が『現在地』であるとなると、その「いま、ここ」は常に変化していくもの。だとすると、そもそも『現在地』というタイトルには最初から矛盾が内蔵されているとも言えるかと。

岡田 その矛盾もさることながら、僕の中では、現実が複数あるという感覚が大きいんですね。だから『現在地』の英訳は「Current Locations」、複数形のほうが良いのかもしれない。「今の日本は」「われわれの社会は」といった主語を使って自分が何かを言うことができないという思いが、強くなったんですね。その主語が示す母集団に自分が属しているかどうか心許ないというか。

相馬 それは、『現在地』初演時に劇場を支配していた空気にも表れていたと思います。それは客席にいる「わたしたち」が複数化していて、その間に生

まれている緊張感だった気がします。これまで日本で演劇を観てきて、あんなに客席がビリビリしたことはなかった。

岡田 ビリビリしていましたね。

相馬 あのビリビリ感は、震災に対する当事者性のグラデーションというか、原発からの地理的な距離感も関係していたんだろうと思いますが、『現在地』を海外で上演した時はいかがでしたか？

岡田 ソウルでも福岡でも、横浜ほどのビリビリ感はありませんでした。それに海外では、放射性物質の影響を気にして九州に移住したことに代表される僕の個人的見解に、賛同してくれる人が多いんです。たとえばドイツには現在、脱原発のムードが強くあるし、エストニアでも上演したんですが、そこはチェルノブイリに近い場所です。だから海外での公演は快適なんですよ、良くも悪くも。

相馬 時間的な距離感もありますよね。相変わらず汚染水は漏れ続け、事態は何も解決していないにも関わらず、時間が経過するにつれて、私たちはこの異常な現実には慣らされてしまっているのではないかな。また、復興のための大きな物語がいくつも発動して、あの時の感覚を覆い尽くしてしまった感もあります。そんな今の東京で『現在地』が上演されると、何が見えてくるのか。

岡田 ほんと、何が見えてくるんでしょうね。それこそが、僕にとってこの作品を今東京でやることの最大の見どころですね。

時限爆弾としてのアートの公共性

岡田 ビリビリ感と距離の話が出ましたが、去年ベルリンのHAU (Hebbel am Ufer) の企画で僕、まさにこの距離の問題を扱った、ちょっとふざけたテイストの小さい作品を作ったんです。それはこれを最後にHAUの芸術監督を退任するマティアス・リエンタールによる、万博のパロディ・イベントの一環だったんですけどね。会場である空港跡地の公園内に建てられた僕たちのための「パビリオン」

は、天井がぶっ飛んだ原子炉の建屋に見えなくもない代物で、それを使って、危険の間近にいる日本人よりそこからずっと離れているドイツ人のほうがはるかに放射性物質の危険を懸念している、という不可解な事態を解明するパフォーマンスをつくったんです。建物に近づいていけばいくほど、恐怖心が不思議と薄れ、むしろ安らぎをおぼえていく、それはなぜか？ドキュメンタリー映画の監督と助監督の二人組が、この謎を解き明かすべく建物に潜入して、お客さんも一緒についていくんですけど、すると建物の中から仏像が出てきて、それは黄金の燃料棒なんですけど、これが安らぎの原因だったのか！というのがオチっていう……。

相馬 まさに脱臼のオチですね(笑)。それにしても万博のパロディとは、実にリリエンタール氏らしい。HAUもF/Tも、世界の色々なところから、面白いものを集めて来て、全く違う文脈の人に「こんな珍しいものがありますよ」と見せているという意味では、万博みたいなもの。そこには圧倒的な距離がある。というのも、海外のアーティストの作品を招聘する時、そのアーティストが直面しているローカルな現実や文脈も含めて観客に差し出すのは不可能だから。でも、その超えられない距離とか、他者の直面している現実が分からないということが分るとか、そういうことも芸術の一つの効用だと思うんです。苦し紛れに聞こえるかもしれないけれど、これは胸を張って言いたい。

岡田 苦し紛れだとは思わないです。だって、自分とは無縁だと思っていた他の人の過酷な現実が、突然身近なものになるというのは、震災によって、すごくよく分かったことですから。たとえば、今回のF/Tで松田正隆さんが原作にするタルコフスキーなんて、まさにそうですね。それまでは、ひとつのショットが長くて眠くなるけどきれいだよねとか、そういう風に平和にのんきに評していたかもしれないけど、自分たちの話として見るのが、いきなりたやすくなってしまった。そういうポテンシャルで観ることができるようになってきている気がします。



[[Unable to see]]

相馬 本当にそうになりましたね。私は芸術や表現は、基本的に個人に立脚したものであると思っています。もちろんその人が属する社会や時代にも立脚しているけれど、それはどこまでいってもローカルなもので、個別的なもの。けれどそれは、時代や地域を越えて、共有される可能性がある。他人の現実が自分の現実と地続きである、ということを示しうる可能性が、私にとっての芸術の公共性、ということなんですけれど、日本ではなかなかそうはいかない。「いまの日本」っていうドメスティックで限定的な母集団に共感が得られないと、公共性がないと批判される難しさがある。岡田さんはご自身の演劇と公共性について、どうお考えですか。

岡田 現代の日本のアーティストの仕事が、現代の日本が抱えている問題のために役立つか、と考えるのは射程が小さくて窮屈だし、それだと役立たない可能性が高すぎだし(笑)、もっと射程をひろくって考えていいんじゃないかと思います。現代の日本の問題の役に立つのが、大昔のどこか別の国でつくられたアートだってことはあり得るのだし、だから逆に現代の日本のアーティストの仕事も、未来のどこかの誰かの中で爆発する。そのいつ爆発するかわからない時限爆弾としての価値を、公共としての価値だと言いたいですね、今の気分としては。

相馬 今ここでの評価や短期的な有効性を越えて、未来に、あるいはまだ生まれていない人たちや別の世界に生きる人たちに対して、普遍性を持ちう



[[地面と床] © Kamel Moussa

るものとしての、時限爆弾としての芸術ということですね。それは芸術の公共論として、とても納得がいきます。

岡田 それもまた放射能のせいで持ちやすくなってしまったイメージです。

相馬 十万年後の核燃料処理に誰が責任を持つのかということと、私達が作る芸術が未来に差し出されてどう作用するのが、パラレルに考えられるようになってしまった。皮肉な話ですけども。

岡田 確率っていう考え方もそうですね。魚の卵みたいなもので、たくさん卵を産むけど、成魚になるのはその中の一個あるかどうか。僕の作品は死んでしまうほうの卵でしょうけど、良いんです。

相馬 F/Tにしても、社会全体から見れば、実際に観に来る人は1パーセントかもしれないですし、死んでしまう卵の方も知れません。たとえば市民社会が成熟しているヨーロッパでは公共性と言った時、たとえわずかでもそれを必要とする人がいる、あるいは今後それが何らかの価値を持ち得るのであれば、その可能性を担保するのが公共、という考え方が成立しているわけだけれど、日本では公共性というと、最大公約数というか、全ての人に平等に届けられねばならないもの、というニュアンスが強い。しかし、最大公約数を取り続けると、日本という国が強くなるために、福島のような存在が切り捨てられていくことも起こり得るわけです。今の日本では、劇場に足を運ぶ人を1パーセントから5パーセントにするためのマーケティングが、芸術の

公共性、みたいに勘違いされている気がしてなりません。未来に差し出された1パーセントの価値を、ほかの99パーセントが許容できるような社会的コンセンサスを作っていくことこそが、日本の未来を作ると私は信じていて、その理念に根ざす芸術の形や力、というものを、しっかりと問い続けていきたいという思いはますます強くなっています。

岡田 僕は震災および原発事故が起きた時、アートに何ができるんだろうという悩みは持たなかったんです。むしろ、マイナーな現実とか、オルタナティブな現実としてのフィクションの重要性が増すと思った。だから『現在地』みたいなをつくったんですし。僕は総体として現代の日本のアーティストをとらえることができるとするなら、そのレベルという価値は、この震災を契機に上がると信じています。ていうかそうじゃなきゃ嘘だと思ふ。

相馬 同時に、それだけの現実に対抗するためには、アートの側の説得力も試されるぞ、と衿を正す気持ちにもなりますね。そのためにF/Tのような場を作ってきたわけだし、これからも志は曲げずにやるべきことはしっかりやっていきたいです。ところで、『現在地』の次の作品である『地面と床』も12月に横浜で上演されますが、この作品は『現在地』の

延長線上に位置づけられるのでしょうか。

岡田 はい。ただし『現在地』のほうが、表に出ない対立、隠された緊張感というのがあって、隠されている、ならではのビリビリ感が味わえるのは『現在地』のほうですね。『地面と床』は顕在化して、そこは大きく違うんですけど、そのことはこの前、パリで二作品を立て続けに上演してあらためてはっきりわかりました。

相馬 なるほど。それをうかがって、今年、両方拝見できるのがますます楽しみになりました。ありがとうございました。

(2013年11月3日／構成：高橋彩子)

岡田利規(おかだ・としき)

演劇作家、小説家、
チェルフィッチュ主宰

1973年横浜生まれ。97年チェルフィッチュを結成。2005年『三月の5日間』で第49回岸田國土戯曲賞を受賞、現代日本の状況を、鋭い言語、身体感覚で切り出す手腕が話題を呼ぶ。以後、国内のみならず、海外でも公演を重ねており、最新作『地面と床』はブリュッセルのクンステン・フェスティバルデザールで初演された。07年デビュー小説集『わたしたちに許された特別な時間の終わり』を発表し、第2回大江健三郎賞を受賞。13年には『遊行 変形していくための演劇論』を刊行。



© Yohta Kataoka

相馬千秋(そうま・ちあき)

F/Tプログラム・ディレクター

1975年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、フランス・リヨン第二大学・大学院で文化政策およびアーツマネジメントを専攻。2002年よりNPO法人アートネットワーク・ジャパン所属。主な活動に東京国際芸術祭「中東シリーズ04-07」、横浜の芸術創造拠点「急な坂スタジオ」設立およびディレクション(06-10年)など。2009年F/T創設から現在に至るまで、F/T全企画のディレクションを行っている。また2012年よりread(レジデンス・東アジア・ダイアローグ)を立ち上げ、東アジアのアーティスト、キュレーターのためのコミュニケーション・プラットフォーム作りに着手している。2012年度より文化庁文化審議会文化政策部会委員。



© Nobuyuki Kagamida

チェルフィッチュ『現在地』をみて

山崎ナオコーラ(作家)

チェルフィッチュの新作『現在地』は、今の日本を生きる私たちに、問いを投げかける。「震災以後」と呼ばれるようになったこれからの時代、この芝居を観劇したら、観客は自分の居場所とも向き合わざるをえない。

タイトルにある「現在地」とは、一体どこを指しているのだろう。芝居の中では明言されない。おとぎ話のように「むかし、あるところに…」という雰囲気から始まり、そのまま終わりへ向かう。

舞台上にはぐり椅子が並べられており、登場シーンでない人物たちが観客然として座り、シーンを眺める。女優たちは大きな声で語り、ときどき観客席にいる私たちを凝視する。「舞台」が、まさにカッコでくまされたように浮き上がる。フィクションとしての場所が立ち上がるが、ときおり「日本」という地名が会話に交じることから、舞台が日本と定義されないまでも、日本を意識して設定されていることがなんとなくわかる。

また、「原発」という言葉は一切出て来ないが、非常事態に陥った共同体から、去ろうとする人と、居続けようとする人との軋轢が起こると、観客は原発問題を想起せずにはいられない。みているうちに私は、「ここは舞台、あなたたちがいるところが『現在地』よ」と指摘されたような気がして、女優たちからむしろ「『震災以後』、あなたはどうするの?」と問われたように感じた。

チェルフィッチュの芝居といえば、ジェンダーレスな男女の会話、ぼそぼそしたつぶやきが織り込まれるせりふ、計算され尽くしているのにただただ動いているだけに見える手足のしぐさ、といったものから、リアリティーあふれる現代劇、というイメー

ジが強い。だが、今作は登場人物が女性のみという偏りのある設定、しかもその女性たちは全員「～だわ」という語尾でしゃべる。作り物感の強調は、震災について表現したり意見を発表したいのではなく、あくまで「演劇」として問いを投げかけたいだけ、という姿勢を表しているのではないか。

すでにベテランの域に達している山崎ルキノがしゃべりだすと、舞台に安定感が生まれる。だが、まだ不安定に見える若い女優が加わって、舞台が船のように揺れ始める。安定している人、していない人、両方いてこそ「演劇」なのだ。考えてみれば、現実世界でもそうである。震災のとき、落ち着いて行動する人もいたが、パニックに陥ってしまう人、不安になってしまう人だった。

だが常に落ち着いて、筋の通った考えを持ち、強い人だけが、存在意義を持つのだろうか。震災後、一貫した落ち着き方で行動した人は称賛されたが、だからと言って、落ち着いて動ける完璧な人のみで構成された社会が、素晴らしいとは限らない。どんな人も排除したくない、パニックに陥る人も、すぐに不安になる人も、生きていける社会であってほしい。さまざまな主義を持つ人たちが、あるいはまだ自分の主義を確立できない人たちが、お互いを受け入れ合って生きていけるようにしたい。多くの人がそう思っているはずだ。

しかし、全員の考え方、感じ方、強さ、弱さを尊重することのできる寛容な社会を作り上げるのはなんと難しい。これからの日本社会を作っていく私たち大人に、課題を与えてくれる芝居だ。

(初演時の劇評：熊本日日新聞2012年5月21日)

作・演出：岡田利規

出演：佐々木幸子、伊東沙保、南波 圭、安藤真理、青柳いづみ、
上村 梓、石橋志保

美術：二村周作
音楽：サンガツ
ドラマツルグ：セバスチャン・プロイ
舞台監督：鈴木康郎
音響：牛川紀政
照明：大平智己
映像：山田晋平
映像オペレーター：須藤崇規
宣伝美術：松本茲人
広報：浦谷晃代、湯川裕子
制作：precog

記録写真：小池浩央
記録映像：株式会社彩高堂「西池袋映像」

F/Tスタッフ
制作統括：武田知也
制作：高橋マミ
フロント運営：坂田厚子
プログラム・ディレクター：相馬千秋

ユース・アート・マネジメント・プログラム(YAMP)：
乾 亜沙美、植村 真、川又美槻、奥水すみれ、菅井新菜、塚田佳都、野口 彩、
的場久美、三浦彩歌、山崎 優、山本美幸、吉田由貴

製作：KAAT 神奈川芸術劇場
共同製作：Doosan Art Center
協力：急な坂スタジオ

主催：フェスティバル/トーキョー

Text, Direction: Toshiki Okada

Cast: Yukiko Sasaki, Saho Ito, Kei Namba, Mari Ando, Izumi Aoyagi,
Azusa Kamimura, Shiho Ishibashi

Stage Design: Shusaku Futamura
Music: Sangatsu
Dramaturge: Sebastian Breu
Stage Manager: Koro Suzuki
Sound: Norimasa Ushikawa
Lighting: Tomomi Ohira
Video: Shimpei Yamada
Video Operator: Takaki Sudo
Publicity Design: Gento Matsumoto
PR: Akiyo Uratani, Yuko Yukawa
Associated Production: precog

Photography: Hirohisa Koike
Video Documentation: Saikoudo Co., Ltd.

F/T Staff
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordination: Mami Takahashi
Front of House: Atsuko Sakata
Program Director: Chiaki Soma

Youth Arts Management Program (YAMP):
Asami Inui, Makoto Uemura, Mizuki Kawamata, Sumire Koshimizu,
Niina Sugai, Keito Tsukada, Aya Noguchi, Kumi Matoba, Ayaka Miura,
Yu Yamazaki, Miyuki Yamamoto, Yuki Yoshida

GENZAICHI was commissioned and produced by KAAT (Kanagawa
Arts Theater) Japan, and had world premiere at KAAT on 20th April,
2012

Co-produced by Doosan Art Center
In co-operation with Steep Slope Studio

Presented by Festival/Tokyo

今後の公演予定

2013年12月14日(土)～12月23日(月・祝)

2013年新作『地面と床』 KAAT 神奈川芸術劇場 大スタジオ(横浜)

<http://www.kaat.jp/>

『地面と床』特設サイト▶<http://jimen.chelfitsch.net/>

2014年2月15日(土)～2月17日(月)

『KOBÉ - Asia Contemporary Dance Festival #3』 Art Theater dB Kobe (神戸)

ピチエ・クランチェン(振付家)×岡田利規×曾田朋子(造形作家)

<http://www.db-dancebox.org/>

2014年5月

2014年新作『スーパーソフトWチョコバナラ(仮)』 Theatre del Welt (マンハイム/ドイツ)

フェスティバル/トーキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家	
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO	
扇田昭彦	演劇評論家	
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長	
樋川幸雄	演出家	
野田秀樹	演出家	
野村萬	狂言師	
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長	(50音順)

フェスティバル/トーキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末弘昌	豊島区文化工部局長
委員	八巻規子	豊島区文化工部局文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務総務課長
法務アドバイザー	福井和彦	弁護士(骨董通り法律事務所)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、 桐山由香、高橋マミ、戸田史子

公募プログラムコーディネート

メディア戦略・広報

メディア戦略・広報アシスタント

オープン・プログラム

オープン・プログラムアシスタント

票券

票券アシスタント

チケットセンター

総務

経理

小山ひとみ

松本花音

北沢聡子、田村かのこ

藤井さゆり

田野入涼子、後藤天

長原理江

常原淳、伊指敏

佐々木由美子、佐藤久美子

葦原円花、一色壽好

堤久美子、青木亮子

技術監督

技術監督アシスタント

照明コーディネート

音響コーディネート

廣川英司

河野千鶴

佐々木真真子(株式会社ファクター)

相川晶(有限会社サウンドーズ)

アートディレクション+デザイン

ウェブサイト

パブリシティ

海外広報・翻訳

物販

編集・執筆

アジール(佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆)

濱田真一+北島謙子+重松トモトカ(株式会社ロフトワーク)

平昌子、望月章宏

アンドリュース・ウィリアム

渡辺淳

鈴木理映子

Festival/Tokyo Organization Committee

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hiroshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuohara	Honorary Chairman,Shiseido Co.,Ltd

Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimaru, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members:
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masako Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuake, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuake
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators:
Chika Kawai, Oriie Kyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanako Tamura
Open Program: Sayuri Fujii
Open Program Assistants: Suzuki Tanoiri, Takashi Ogo
Ticket Administration: Rie Nagahara
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyomyong Yoon
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Ishishi
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

Technical Director: Eiji Torakawa

Assistant Technical Director: Chizuru Kuno
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction + Design: Asy (Naoki Sato + Kohel Nakazawa + Masataka Kikuchi)

Website: Shinichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (ofwork Inc.)
Public Relations: Masako Arita, Akhiro Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Association for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.

Supported by Asahi Group Arts Foundation

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEDANKYO

Special co-operation from SEIBU IBEKUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IBEKUKURO,

TOBU RAILWAY CO., Ltd., Sunshine City Corporation, Caccott Co., Ltd.

In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association
Media Partners: ART.IT, J-WAVE 81.3 FM, SHINKO, CINRA.NET, Blixtus Tacho
Hotel Partners: Sunshine City Prince Hotel, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Sakura Hotel Ikebukuro

Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr

PR Support: Poster Haru's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会

東京都・豊島区・アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場(公益財団法人東京歴史文化財団)・公益財団法人としま未来文化財団・NPO法人アートネットワーク・ジャパン

共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO)日本センター

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、ブルームバーグ エル・ピー

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

後援：外務省、公益社団法人日本芸術家連盟団体協議会

特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東京鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、

チャコト株式会社

協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区

観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋イベント推進協力会、

池袋ホテル会

メディアパートナー：ART.IT, J-WAVE 81.3 FM, 新潟, CINRA.NET, 美術手帖

ホテルパートナー：サンシャインシティプリンスホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、

チャコト池袋店

地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まちづくり

宣伝協力：株式会社ホステス・ハリス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート(公募プログラム)

会場協力：アサヒ・アートスクエア(公募プログラム)

認定：公益社団法人企業メセナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

【会期】平成25年11月9日(土)～12月8日(日)

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)

主催：ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP) / 石井菜保子、伊集院萌、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾壺沙美、今井美希、榎村真、大田 久、緒方真由、紙 弘香、川又美樹、栗田知宏、奥水すみれ、崔 瀧、作原飛鳥、佐藤成行、澤田 隆、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、菅川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花鈴、嵯 朝美、嶋久美、三浦彩歌、水野美奈、守山真利恵、山崎 倫、山本美幸、吉田 恭大、吉田由貴

F/Tメンバー：青木奈々絵、青木由香、青柳佳代子、阿原乃里子、別荘真由子、飯森明香、五十嵐結子、石川世梨、石川拓夫、堀又義雄、今泉友来、岩城春寿、大原尚子、大嶋純子、大津佑子、大村真央、大和田真未、岡本静華、小野寺あすり、小野菜津美、鐘味佳代、片桐根子、加藤真帆、加藤佑麻、金子環美、川島 幸子、桐谷佳美、工藤咲咲、桑島剛史、鷲宮衣子、小平怜奈、五藤 真、後藤真哉、小林淳平、齋藤 利央、崎濱梨枝、佐藤裕香、佐藤直子、染田 光、清水裕加里、齋宮真子、杉崎由佳、鈴木明子、鈴木朋子、岡島悠生、平里梨香、平 七海、高田信治、高橋 類、高松晋子、宮川向子、竹之内さやか、竹之内麻子、田中佑、手塚 哲、寺元奈津美、照沼詔尊、戸塚 碧、藤田知子、ドラクサンゼン、中村直樹、中村光子、中村優子、中野野斗、西本健吾、平松里子、広田 牧、藤田 輝、藤田 麻、藤林さくらよ、ブリジット、コナー、古庄美和、堀越時芽子、溝口 凜、村川莉子、村田陽亮、百瀬美樹、矢田沙和子、山口侑紀、山科有良、米谷今日子、四方田満子、和田幸子、渡邊早紀ほか

発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL:03-5961-5202 <http://festival-tokyo.jp/>

編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平(ASYL)、小林 剛 断無断転載

※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。